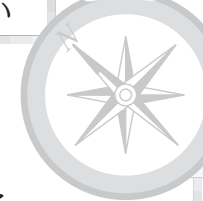


前線があつという間に東北を駆け抜け、本州北端を通り過ぎつつある。花びらと香りに接するだけで喜びがわき上がってくる。ただ、春はやや気が沈む季節でもある。若者たちが進学や就職で故郷を東北を後にする。総務省の2025年「住民基本台帳人口移動報告」によると、東北6県はそれぞれ約2000〜7200人の転出超過だった。私が住む青森県は4542人に達し、その9割に当たる4113人が3、4月に集中した。今年はどうなるだろう。

加えて、特に青森市内では最近、とても気になる言葉を見聞きする場面が増えた。「このまちは大好きだ。雪かきも頑張ってきた。でも、そろそろ限界かもしれない」「子どもが住む首都圏へ移り住むことを本気で考えている」。24、25年と2シーズン続けて豪雪が津軽地方を襲い、都市機能の停滞や多くの人的・物的被害をもたらした。そのダメージを経て、多くの

# 座標



人が将来への希望を失いかけていくように見える。

自分も「あと8カ月もすれば雪がまた積もり始めるのか」と少し気がめいつている。春先、こんなふう考えたのは初めてかもしれない。25年度に青森市が設置した除排雪検討会議の座長を務め、議論と検証を経て、除排雪問題があまりに複雑かつ多領域に渡ることを思い知らされた。その影響だろうか。地元では市議会などで、雪を巡る確執が尾を引く。気候変動に伴い常態化したところある豪雪が地域社会にひびを入れていっているのではと危惧する。検討結果は学会で

## A I 活用 課題解決探る

### 豪雪に向き合う

発表し、論考もネットで公表した。しかし、その過程で、豪雪都市の除排雪に関する先行研究がほとんどないことが分かった。

歴史をさかのぼれば、雪が地域の姿を一変させたと言われる事例もある。1962年から63年にかけて日本列島は厳しい寒さと雪に見舞われ、死者は288人に上った。気象庁はこの豪雪を「昭和38年1月豪雪」（通称・三八豪雪）と名付けた。「限界集落の真実」（山下祐介著）によれば、三八豪雪は中国地方などの山間地域で、住民が世帯ごと山を降りる「挙家離村」を引き起こすなど、過疎化に拍車をかけたという。北陸でも同様の事態が起きている。歴史は再来するか、気掛かりだ。しかし、ただ悲観しても仕方ない。何より、雪が大好きな若者が身近にいる。例えば、3月に私のゼミを卒業した学生はミラノ・コルティナ冬季パラリンピックのスキー距離競技で複数入賞を果たした。顔向けできる努力をしなければ。

青森大ソフトウエア  
情報学部教授  
榎引 素夫

（青森市）

る努力をしなければ。

私は今春、社会学部からソフトウエア情報学部に移った。また、私が所属する、デジタル技術による社会貢献を目指す団体「コード・フォー・アオモリ」は先月、青森大学、青森県むつ市などと協力し、高校生と大学生、社会人が人工知能（AI）を活用して地域課題解決を考える催しを開催した。ガイダンスの例題には「雪にどう向き合うか」を取り上げた。来月には、私が主宰する勉強会で「雪ワークシヨップ」を開く。「雪のない季節に雪のことを考える」仕組みをつくっていききたい。